



### Profile — 内田伸子

1970年、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了。学術博士。一橋大学社会学部助手、お茶の水女子大学文教育学部講師、助教授、教授を歴任。専門は発達心理学、認知心理学、言語発達心理学、幼児教育、保育学。著書は『子育てに「もう遅い」はありません』（富山房インターナショナル）など。

私は1996年9月1日～1997年6月30日までの1年間、米国スタンフォード大学の心理学部と言語学部の客員研究員として研究三昧の生活を送った。

私はスタンフォード大学の附属小学校と附属幼稚園をフィールドにして第二言語としての英語習得の過程について研究した。スペイン、フランス、ドイツ、イラン、スイス、イタリア、さらにアジア諸国—中国、韓国、台湾、日本、フィリピンやタイなどから留学生家族の子どもたちがキャンパス内の附属小学校や幼稚園に通っていた。母語の特徴は英語習得にどんな影響を与えるかを調べたいと思っていた私にとっては、願ってもない好都合なフィールドであった。子どもの実験には、心理学部と言語学部の子どもと同国出身の留学生にテスターになってもらったので、緊張度の低い実験環境で豊かな発話データを採ることができた。

あるとき、字のない絵本 *Frog, where are you?* を材料にして物語をつくるという課題をやっていたと

## スタンフォード大学での暮らしは天国だった！

十文字学園女子大学 特任教授／お茶の水女子大学 名誉教授

### 内田伸子（うちだ のぶこ）

き、英仏独語などインド・ヨーロッパ語族の子どもたちと日本や韓国出身の子どもたちの語る物語の展開構造がまるで違うのに気づき驚いた。たとえば、男の子と犬が眠っている間につかまえた蛙が逃げ出すという場面については、日本語・韓国語母語話者は、「男の子と犬がベッドで眠っていた。そして蛙がこっそり逃げ出した」と語る。ところがインド・ヨーロッパ語族の子どもたちは「蛙がこっそり逃げ出した。どうしてかという、男の子と犬が眠りこけていて、音に気づかなかったからだ」と語るのである。すなわち日本人の幼児や児童は、出来事の説明において「時系列」（forward reasoning； And-then reasoning）によるものがほとんどであり、英語母語話者は、幼児も児童も「因果律」（backward reasoning； Why-so because reasoning）を用いて論拠を説明するのである。文法習得過程で母語文法からの干渉を受けることはよく知られているが、母語談話の構造が英語談話に影響を与えることは知られていなかった。日本語母語話者では結論を先に述べ後から理由づけや論拠を述べて説得するような談話は生まれにくい。欧米では幼児期後期から始まる「結論先行型作文教育」や「言語技術」（Language Arts）の教育の必要性を強く感じると共に、5年前から熊本大学附属小学校の先生方と協働で取り組んできた「論理科」カリキュラムの開発と普及活動につながった。

研究の合間には、コロキアムに

出席して、海外から集まってくる先端研究者たちの最新の研究成果を聴いた。また、APAから何度も全米優秀教師賞を受賞した社会心理学者 Zimbardo の「心理学入門」（月水金の11時～12時半）の授業にも出席した。授業の内容に関連するメッセージングを流し、衣装も変えるなど、毎回観劇しているようなワクワク感に包まれる素晴らしい授業であった。

初めての海外生活の拠点は、パロアルト郊外のアパート（4軒長屋）だった。アパートの住人はいずれもスタンフォード大学の客員研究員たちである。右隣には耳鼻咽喉科医の Marc（仏）と眼科医の Esthe（トルコ）の同棲中のカップル、左隣には化学者の Brett（豪）と小児科医の Fiong（豪）夫妻、さらにその隣にはチェコスロバキアからの情報科学者 Simona とスポーツ店経営の Jim の新婚さんが住んでいた。私たちはすぐに親しくなり、金曜日の夜は持ち寄りパーティーを開き、それぞれの国のお料理談義に花を咲かせた。週末にみな家がにいるときには、私の家でランチを食べる習わしだった。お茶会もしばしば催した。彼らはみなこの東洋の不思議な「お茶会」の雰囲気をととても気に入ってくれた。

以上のように、公私共にスタンフォード大での暮らしは私にとって天国であった。18年経った今も、あの「天国の暮らし」が、そして、なつかしい友人や隣人たち、実験に協力してくれた子どもたちの顔や声、話し方までが、昨日のこのように鮮やかに蘇ってくる。